
義妹パラダイス

ぬほほほっ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹パラダイス

【Nコード】

N0325BA

【作者名】

ぬほほほっ

【あらすじ】

ヤンデレの義妹に殺されて、嫌々ネギま！に転生した。原作の600年前にエヴァに血を吸われて、また死亡した。そして、もう一度神と会ってもう一度ネギま！の世界に行く事を決意した

第1話・予想外な再開（前書き）

ユウで書いてましたが諸事情により、こちらで書かせてもらいます

O r z

第1話・予想外な再開

今日初めての彼女と初デートをした

二十歳になって初めての彼女だ！

夕飯は彼女と一緒に食べたので、風呂に入ってベットにダイブする

俺の家族は父、義母、義妹と俺の4人家族だ

俺が二歳の時に母が死に、父が1人で8年間育ててくれた

十歳の時に今の義母を紹介されて、いきなり結婚したいと言われた

時は驚いたが、承諾？した

義母の連れ子は三つ下で、人見知りの激しい子だった

懐かしいな・・・よく義母の後ろに隠れてる子だった

「ふあむ・・・つと、今日はかなり疲れてるな」

仰向けで大の字になって目を瞑る

初めてだったから、いろいろ緊張したな

手を繋いだ時は、心臓が張り裂けそうなほどドキドキした

今も胸が痛いくらいだ

初めてのキスは・・・そう、鉄の味だ

・・・え？

「・・・ごぶつ・・・何が・・・？」

胸が熱い、何か液体が口まで這い上がってきた

目を開けると・・・

「・・・お兄ちゃん」

義妹が俺の上で馬乗りになり、包丁で胸を刺していた

「な・・・なん・・・で・・・?」

痛みは無い

混乱してるからかな?

だんだん力が抜けていく

瞼が重くなってきた

「お兄ちゃんが悪いんだよ?」

グサグサと何回も包丁を突き立てる義妹

・・・よく意識があるな

普通なら即死だろ

「私が居るのに、他の女に手を出すなんて・・・」

義妹は大きく振りかぶる

最後の一突きだろう

視界の隅では、両親が慌てて入ってくるのが見えた

・・・もう間に合わないだろう

包丁は勢い良く顔面に向かってきた

私が誰よりも愛してるのに

それが俺が最後に聞いた言葉だった

「うーん・・・ヤンデレだね」

・・・あれ？

今殺されたんじゃない？

いつの間にか、白い部屋に居た

ソファアが二つあり、間にテーブルがあるだけの白い部屋

そのソファアの1つに俺が座ってた

「うん。君は死んだんだよ」

反対側のソファアに座っている金髪イケメンが答えてくれた・・・
つてか、心を読まれた？

「僕は神様だからね」

「・・・そうか」

ソファアに身を預けるように座り直す

「あれ？驚かないんだ」

「普通に義妹に刺されて死んだんだから・・・死後にどうなるか
気になったから、考えた事もあるんだよ」

いろいろ考えたな

天国、または地獄に行く

そのまま消滅する

記憶が無くなり生まれ変わる

断片的な記憶があるまま生まれ変わる

などなどだ

極稀に記憶があるまま生まれ変わるって聞いたこともあるな

「いろいろ歪んでるね」

ニコニコ笑いながら言うイケメン神

「へいへい・・・んで、俺はどうなるの？」

まさか義妹に刺されて死ぬとは思わなかった

・・・あんなに懐いてたのにな

「君には別の世界に行ってもらおう。3つの特典も付けるよ」

「別の世界？何で行かなきゃいけないんだ？」

・・・面倒くさい

なんで別の世界にまで行かなきゃならんだ？
そして何故俺なんだ？

「面倒くさいって・・・普通の人なら喜ぶよ？3つも特典をあげるんだよ？」

少し焦りだすイケメン神

そんなに行ってほしいのか？

「俺にこだわる理由は？」

「たまたま君が死ぬ瞬間を見たからだよ。義妹がヤンデレ化して刺されるって・・・インパクトが強かったからね」

しかも彼女との初デートの日だからな

「そのわりに憎しみとか無いんだね？」

「恨んでもしょうがないからな」

「器がデカいとかの話じゃないね・・・っと、話がズレ過ぎた。頼むよ、別の世界に行ってくれよ」

・・・神が懇願

なんか優越感があるな

「別の世界って？」

「おっ！行ってくれるのかい！？」

顔が近い！

身を乗り出すな！

「話を聞いただけだよ」

「前向きに考えてね？・・・世界は魔法先生ネギま！の世界だよ」

・・・魔法先生ネギま？

「あの少年マガジンに連載されてるネギま？」

「そうそう」

「断る！」

「なんでさー！」

当たり前だ！

死亡フラグ満載で、国崩壊フラグも満載！

国のトップが駄目なのが大半！メガロメセンブリアの元老院とか、正義の味方（笑）とか！

さらに世界崩壊とか、ありえないだろ！！

「他はないのか？」

「ごっめ〜ん。無いんだ」

かるっ！

しかも両手を顔の前に合わせて、ペコちゃんスマイル・・・うん、ウザイ！！

コイツの相手は疲れるな

早く決めちまおう！

「・・・はあ、もう3つ決まった」

「おおっ！行ってくれるか！！」

目立たないように、戦には参加しないようにする！

これは絶対条件だ！・・・イケメン神にバレないようにな（笑）

「そうそう、絶対に魔法使いか、魔法関係者になってもらうよ」

魔法使い、魔法関係者になるのは絶対なのか

なら、大戦時やネギに関係しなければ大丈夫か？

「1・原作の600年以上前にしてくれ。2魔法先生ネギま！の未

来の知識を消してほしい。3・性別は男性にしてくれ」

「なっ！」

イケメン神が驚いた・・・誰が好き好んで戦争に参加するか！

これで静かに暮らせるだろう

1があれば、一番激しい戦争に強制されることは無いだろ！

2は正直知識があっても介入する気無いしな、人物と一般常識？があれば十分だろ

3は・・・無理矢理だな

女になるのは嫌だっただけだし

「ちゃんと3つ選んだぞ？もう十分だろ？」

ニヤニヤ笑いながら言ってる

普通の村人に産まれて、結婚して、子供が産まれて死ぬ・・・うん、満足だ！

「クツ・・・わかった」

イケメン神が書類を取り出して何かを書き始めた

日本語・英語じゃないからわからない

しかもブツブツ何かを言ってる・・・何かをしようとしてる？

「あれをこうして、ここにこれを入れれば」とブツブツ言ってるし

「余計なことするなよ？」

「・・・ん？」

おい！！

何で動揺してんだよ！
何をしてるんだ！？

「何を企んでる！？」

「な、何も企んでないさ（焦）それより名前どうする？」

「（焦）ってなんだよ！名前なんてなんでもいいよ！何をした！？」

「もう時間だね！じゃあ行ってらっしゃい！！」

イケメン神は焦るように書類に殴り書きをしてハンコウを押した

「書類を寄越せ！」

俺が勢い良く立ち上がった時に・・・地面に穴が開いた

「またね〜」

笑顔で手を振るイケメン神・・・イラつくな！

必死に穴の縁をに手を掛けようとしたら・・・さらに大きくなった！
もう無理・・・落ちていく

西暦1388年、エヴァが真祖の吸血鬼になって一年が過ぎた頃

エヴァは破壊された施設で1人の男性に出会った

男性は顔の右半分が潰れて、右腕が何者かに引き千切られたように
無くなっていた

「やあ、お嬢ちゃん。こんな所でどうしたんだい？」

男性は明らかに重傷なのに、床に座って壁に背を預けながら、何語もないようにエヴァに話し掛けた
しかし、声は普通でも身体はグツタリと弱々しかった

「お・・・おじさん大丈夫なの？」

エヴァはビクビクと怯えながら、男性に話し掛けた

「おじさんはヒデーな。俺はまだ18だぞ？・・・それから俺はもうダメだな。身体が少しも動かねえ」

男性は苦笑しながら話すが、身体はピクリとも動かない

「もう一度聞くけど、嬢ちゃんは何で此処にいるんだ？」

「えっと・・・お腹空いたから」

エヴァは俯いてボソボソと今にも消えそうなほど小さな声で答えた

「クツ・・・クハハハツ！！ゴホツ！」

男性は一瞬キョトンとした顔をしたが、直ぐに笑い出して、血を吐いた

それに対してエヴァは戸惑うように一歩下がった

「そうか。お腹が空いて、こんな今にも崩れそうな施設に来たのか・・・人間じゃないな？」

エヴァは男性の最後の言葉でビクツと体を震わせて恐怖の顔をした
恐怖は恐怖でも、拒絶される恐怖である

「わ……私は人間だよ！」

エヴァは涙目になりながら、自分に言い聞かせるように声を張り上げた

「いいや違うな。その膨大な魔力、腹を空かせて血の匂いが充満している施設に来た事から……吸血鬼か？それも真祖だな」

エヴァの顔色がさらに悪くなった

「あ……ちが……えう……」

エヴァは視線をキョロキョロと泳がせながら、しどろもどろになった

「血を吸うなら俺の血を吸えよ。この施設で生きてるのは俺だけだからな……それから俺は少し特別だからな。魔力の保有量はかなりだからな」

男性は唯一開いていた左目を閉じながら言った

エヴァは、動揺しながら男性の顔と首を交互に見た
そして……ゴクンと唾を飲んだ

「どうせ血の匂いを嗅いで我慢出来なくなってるんだろ？……一思いに噛み付いてくれ」

男性が話した瞬間に、エヴァは勢い良く泣き笑いしながら男性の首

筋に噛み付いて血を吸いだした
その時のエヴァの顔は、子供が好物を食べる時の顔だった・・・

「またここか」

死ぬ間にエヴァに血を吸わせて、気が付いたらネギま！の世界に行く前の場所に居た

机の向かいにはイケメンの神が座っている

「18で死んだのか。せつかく保有魔力をナギクラスにして、気もそれなりにした。それから存在を安定させる力も・・・残念だ」

イケメン神は書類を見ながら無表情で言ってくる
残念とか言ってるけど全然残念そうじゃないな

まあ、俺には関係ないけどな
そんな事よりも・・・

「俺をネギま！の世界に戻せ！」

ダン！！机を叩きながら言う

そしたらイケメン神はニヤーと嬉しそうに顔を歪めた

「どうしたんだい？前はあんなに嫌がってたのに」

ニタニタと笑いながら言ってくる

本当にム力つくな・・・イライラしてくる！

「あの世界でやらなきゃいけない事が出来たんだ」

エヴァのあの顔・・・何故か義妹と被ったんだよな
今にも壊れてしまいそうな顔だった

「今度こそ、ちゃんと三つの能力を貰ってもらおうよ」

「ああ、解ってる・・・」

「じゃあ、何にするんだい？」

「私の救世主さまの『救世主の力』、めだかボックスの『完成』、
最後に『物を完全に複製する力』だ」

「物を完全に複製する力？無限の剣聖じゃなくて？」

「俺はあの人みたいに生きる事は出来ないからな」

「ふ〜ん・・・（それから救世主の力だけじゃ無なんだけどな。1
3騎士を世界中に散らばめておけば大丈夫かな？）」

イケメン神はサラサラと書類に書いていった・・・何で生き生きと
してるんだ？

「今回は原作の時期になるからな」

「解ったから早くしろ！」

「せっかちなね じゃあ送るよ」

イケメン神がパチンと指を鳴らした瞬間、眠気が襲ってきた
全てを救おう・・・今度こそ！！

side・エヴァ

私は真祖の吸血鬼になって初めて血を吸った男を忘れない
忘れてはいけないのだ
私はアイツに会わなかったら、とつくの昔に自ら死を選んでいただけ
らう

吸血鬼になったら吸血衝動が酷かった
何時も喉が渴いて、いくら水を飲んでも満たされない毎日だった
しかし、アイツの血を飲んでからは、今までが嘘のように吸血衝動
が収まり、日の光や真水なども平気になった・・・ダルいと感じるが
そして何より助かったのは、アイツの記憶の中にあつた魔法知識だ
アレのおかげで我流ではあるが、魔法を覚える事が出来た
アイツの為にも生きなければと思っていたら有名になってしまった
今では私の名前を知らない者は居ないだろう
全てはアイツのおかげ・・・全てはアイツの為に・・・全てを捧げ
て私は生にすぎる

誰も愛さず、誰からも愛されない
それが私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ

「それでは付いて来てくれんかの？」

そして今は、麻帆良学園近衛近右衛門で化け物にある場所に案内されている
全てナギの所為だ！

いきなり現れて、「悪いけど封印させてもらっわ。ある奴に頼まれ

てんだ」と言つて、魔法をぶつけてきた
しかも金髪の女と・・・ロリコンも一緒に居たな
3体1で襲つてきおつて・・・大戦の英雄2人に、災厄の魔女だぞ
！勝てるか！！

「おい、何処に行く気だ？」

「フオッフオッフオッフ・・・エヴァがコレから住む場所じゃよ」

「ハッ！私が住むだと？何故住宅街なんだ？」

「今から行く所は、僕の友人の家じゃ。正確には家が出るまでの
飯の住まいじゃな」

「いったい何処に連れて行く気だ？この爺は

「着いたぞ」

私の目の前には立派な神社があるな
まさかこの神社か？

「ここ、龍宮神社で過ごしてもらつからの」

「・・・・・・吸血鬼である私に、神社で暮らせと？」

「笑わせるな！

「神社か教会しかないんじゃないよ。それにエヴァに会いたいと言つて
おる者が此処にいるので」

私に会いたいだと？

物好きも居たものだな

おっ！

三歳くらいの子供がトコトコと歩いて来て私も前で立ち止まった
そして……

「やあ、お嬢ちゃん。こんな所でどうしたんだい？」

と言ってきた

……

なんで今アイツの事を思い出したんだ？

話したのは一回きりで、一分も話していないアイツ

「おいおい、もしかして俺の事を忘れちまったのか？」

このガキは何を言ってるんだ？

もしかして、あの事を言ってるのか？

「あ……ちが……えう……」

私は視線をキョロキョロと泳がせながら、しどろもどろになった

「昔と同じ動揺の仕方だな」

二カツと笑いかけてくる子供

「ま……まさかあの時の……？」

「お、覚えててくれたか！いや、嬉しいね」

「あ、あはは・・・奇跡だ」

まさか、また会えるなんて夢にも思わなかった
私の命の恩人で、一目惚れしたアイツに

「一応始めましてだからな。俺は龍宮連夜だ。よろしく」

「わ、わた・・・私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

その時私の頬に何かが流れたのを感じた

第2話・義姉？義妹？（前書き）

無理矢理感があるorz

そして・・・駄作だorz

第2話・義姉？義妹？

side・連夜

只今、エヴァを迎えて夕飯を食べている

テーブルには、俺・エヴァ・父さん・母さん・祖父ちゃん・兄貴の順に座ってる・・・円形だから順とか関係ないんだけどな

「・・・・・・・・」モグモグ

「・・・・・・・・」モグモグ

「・・・・・・・・」パクパク

全員無言で食べてるから静かだ

ウチは食事中は静かに食べるがモットーだから、問題ないんだけどね

「ごちそうさま・・・ふう、それにしてもこの子が闇の福音なのか
？」
ダーク・エヴァンジェル

自分の分の料理を食べ終わった祖父ちゃんが、お茶を飲んでから話しかけてきた

「・・・・・・・・」モグモグ

俺は無言で食事を続けた・・・だって、母さんが睨んでくるんだもん！！

「んぐ・・・ふう、そうだよ」

ちゃんと全部食べてから話す

「前にも言ったけど、俺には前世の記憶があるからね。鼻水垂らしてベソベソ泣いてたエヴァだよ（笑）」

「なっ!!」

俺の言葉にエヴァが反応した

しかし、母さんに睨まれて黙った

やっぱりエヴァでも母さんには勝てないか・・・食卓の母さんに勝てる人を見た事無いからね

それから、ぶっちゃけると俺が前世の記憶持ちっつてのは言っただけ、初めは家族全員戸惑っただけど、祖父ちゃんの「将棋できるか？」の一言で馬鹿らしくなっただけ

結局、俺が龍宮家次男には変わらないらしい・・・メツチャ嬉しかったです。涙ポロポロ流してしまいました!!

そして今更だけど、

祖父ちゃん・原太

父さん・良平

母さん・一恵

兄ちゃん・陽一

って名前だ

兄ちゃんは俺よりも三つ年上だから、今六歳になる

「エヴァの家って、麻帆良学園の森林の中に造るんでしょ？」

祖父ちゃんが全部一人で仕切ってるから、詳しくは解らないんだよな
エヴァが来るってのを言ったら、祖父ちゃんが家を造るって言い出したんだよな

一応龍宮家の所有地らしい・・・結構張り切ってるから、祖父ちゃん好みの家になるんだろうな
因みに、俺がナギに頼んでエヴァを封印してもらった張本人（笑）
見返りはアスナの成長安定化と無力化の副作用安定化だ
どうやら、前の時の能力も引き継いでるみたいなんだよな

「そうじゃ、総勢10人は住める屋敷にするつもりじゃ!」

嬉しそうに言ってくる祖父ちゃん

10人ってエヴァ1人なのに・・・多過ぎとかの問題じゃないよね?

「ほどほどにしといてくださいね?・・・エヴァちゃんはトマトジュースで良いかしら?」

母さんものほほんととお茶を飲みながら、軽く注意しただけだし
そしてエヴァにトマトジュースを出したし

因みに龍宮家では食後はお茶を飲むのが日常?だったりする

「そう言えば、エヴァちゃんは学校に通うんだったね?戸籍とかあるのかい?」

父さんが食器を片付けながら、優しく問い掛けた・・・全員エヴァの事を普通に受け入れてるな
話してる内容は微妙だけど

「あ、はい。今まで放浪生活だったので」

「ホームレスだったの?」

「ぶっ!」

兄さんの言葉が的を得てるよ！

確かに放浪生活はホームレスだ（笑）

エヴァもこの雰囲気でキャラが壊れてるし

「じゃあ、戸籍を作らなきゃね」

「だったら私達の養子になりなさいよ。昔から女の子が欲しかったのよね　いいかしらお父さん？」

「僕は隠居した身だからの。好きにするが良い」

「じゃあ決定ね」

「じゃあ、明日必要な書類を貰ってくるよ」

「お願いね」

話がドンドン進んでく〜

俺と兄さんは何時もの事だから、我関せずにお茶を飲んでる

エヴァは話す人を目で追って、キョロキョロしながら戸惑ってる
もう予想外の事ばかり起きてるんだろっな

「あれ？そしたらエヴァってどうなるんだ？」

中学に通うから義姉になるのかな？

でも、中学を卒業できないから最終的には義妹になるんだよな？
エヴァって微妙な存在だ

「そうじゃな・・・2人が中学を卒業する時に変わるじゃろうっな」

「じゃあ、僕達が追い付くまでお姉ちゃんなんだ」

兄さんの言うとおり、途中まで義姉で中学以降は義妹になるんだな

「ふふっ、私が義姉か。義姉の言う事はちゃんと聞くんだぞ？」

エヴァがニヤリと笑いながら俺に言った

「肉体年齢では年下だけどね。精神年齢では俺の方が7歳年上だろ？」

「むっ？それもそうだな。私達が会った時、私は11歳でお前は18歳だったな」

本当は違うけどね（笑）

「だったら、家を造る必要なくね？」

普通は全寮制だけど、エヴァは特例で自宅通学になったからな
エヴァを養子にするなら、ここから通えばいいんだしな

「.....」

祖父ちゃんが分かり易く落ち込んだ
そつとう楽しみにしてたんだな

「いや、研究もしたいから造ってほしい」

「そうか！では、継続して造るわい！」

エヴァの言葉に生き生きと答える祖父ちゃん

「どんくらいで出来るだ？」

「そうじゃな・・・半年くらいじゃな」

「それくらいなら、今から研究に必要な物を買えば間に合う・・・
連夜、明日買い物に付き合ってくれ」

・・・え？

今までエヴァは祖父ちゃんと話してただろ？

何で俺に話しかける？

「ちょうど良いじゃない。そのついでに案内もしてあげなさい」

何故か、父さんと養子縁組みの話をしてた母さんも参戦してきた！

「頼むぞ」

何故かエヴァも嬉しそうだ

「まあ、いいけどね」

俺も欲しい物があつたからね

翌日エヴァと一緒に買い物に出掛けた

第2話・義姉？義妹？（後書き）

まだ義妹を誰にするか決めてないんですよね

原作同様、真名は龍宮家の養子にしますがね！

第3話・そう言う事だったのか!! (前書き)

いきなり4年経過してます

お気に入り数が150を超えたぞ!?

第3話・そう言う事だったのか!!

エヴァが龍宮家の養子になってから4回目の春が来た
今年の4月には俺は小学一年になり、兄さんは四年だ
そしてエヴァは、もう一度中学生をやり直す事になった
それを知ったエヴァはorzポーズで落ち込んでたけど、いきなり
「いや待て。このまま繰り返し返せば、連夜と・・・」とブツブツと言
い出して最終的には元気になった

「筆記用具は買ったか？上履きは？クリアファイルは大丈夫か？」
入学準備の為にランドセルに荷物を入れてたら、エヴァが後ろでソ
ワソワしながら聞いてくる
落ち着けよ、お前はおかんか!!

「落ち着けて、ちゃんと用意したから」

エヴァの方に向き直りながら言う
なんでエヴァは入学する俺よりもテンションが高いんだ？

「終わったよ」

ずっと座ってたから尻が痛い

「では行くか！」

俺の手を握ってグイグイ引っ張るエヴァ・・・本当子供みたいだ

「連夜の事は、お義父さん達に頼まれたんだからな」

・・・何故かエヴァは父さんの事をお義理父さん、母さんの事をお義母さんと呼ぶ

まあ、養子だから問題ないんだけど・・・何か違和感があるんだよね

「俺の異能は『安定』だからね。特異性もない補助の力だよ」

龍宮家は対魔の一族らしい

龍宮家の血縁者は異能持ちだったりする

祖父ちゃんは『爆撃』で、父さんは『解放』で、兄さんが『変化』だ
『爆撃』は触れる物を爆発させる力・・・有機物、無機物問わないらしい・・・チートだよな？

『解放』は者の記憶を『解放』するなど汎用性が高い・・・武器の持ち主の記憶を解放、真名解放・・・アーチャー？

『変化』は物質『変化』、形状『変化』と意外と便利らしい
それに比べて俺は・・・異能って神様に貰った力だよな？
龍宮家の異能じゃない来もするんだけどね？

「『安定』も異能者や、半妖などには有り難いスキルだぞ？」

若干自暴自棄なっていたら、エヴァが話しかけてきた

そんなに良いかね？

『安定』って

「『安定』なら異能者や半妖の力が暴走しないように出来るからな
それに唯一半永久的に持続する力だからな・・・私も助かったからな」(ボソツ)

「そうかね？・・・最後何か言った？」

最後の方が良く聞き取れなかったんだよな

「な、何でもないぞ！ほら早く行くぞ！」

頬を若干朱くしながら怒鳴られたし

エヴァと手を繋ぎながら、祖父ちゃんがエヴァの為に造った屋敷に向かった

side・エヴァ

今私は用意してもらった屋敷の前で、連夜の修業を見ている
用意してもらった屋敷なのだが・・・本当にデカイ

10人は住める屋敷と言っていたが・・・余裕で30人は住める大きさだ

あの爺さんの感覚は、おかしいだろ！！

全ての部屋が三人部屋並の広さだからな

一階に6部屋、二階に5部屋だからな

風呂は浴場だし、大広間もありトイレは三つ・・・考えると頭が痛い
いな

「ふう・・・」

「溜め息なんて吐いてどうしたんだ？」

瞑想をしていた連夜が片目だけを開けて聞いてきた

「少し考え事をしてただけだ。それよりどうだ？」

「『安定』を使ってるから、瞑想も安定するね。これで魔法の才能があれば良かったんだけどね」

連夜は苦笑いをしながら言ってきた

連夜は魔法の才能がない

タカミチみたいに、完全に出来ないのではなく、膨大な魔力が濁流のように流れるから安定しないのだ

そして、魔法発動に必要な魔力と実際の消費魔力が比例してないのだ・・・失敗するうえに魔法に変換できなかった魔力が無駄に流れ出してしまうてる状態だ

連夜がソレを知った時、「俺はナルトか!？」と叫んでいたな・・・ナルトって誰だ？

「『安定』も同時使用するばなんとかなるだろ？今はその為の修行なんだ」

「それもそうだな。今は地道にやってくしかないか」

それだけ言うと連夜は、また目を瞑って瞑想を続けた

今連夜がやっている瞑想は魔力と気の両方を感じる為の練習だ

魔力を魔法に変換するのが苦手なのだから、膨大な魔力をそのまま使ってしまうとなった

最終的には究極技法の『咸卦法』を覚えてもらう

出来れば、『闇の魔法』も習得してもらいたいものだな

異能の『安定』があれば、闇に堕ちる事もないだろうしな

魔力も気も申し分ないくらいの量なのに、扱いこなせてない・・・
なんか不憫な奴だな

連夜は若干ネガティブになる傾向があるからな

しかし！

そんな弱った連夜を優しく見守る私・・・連夜の妻の座は、もう決まったも同然だの

「なにブツブツ言ってるんだ？ニタニタして気持ち悪いぞ？」

「なっ！・・・今は良いさ。いずれ連夜は・・・ふふっ」

「????・・・本当に解らない奴だな？」

そして連夜は私を置いて屋敷の中に入って行った・・・時々私は嫌われてるのでわないかと思う時があるorz
私も連夜の後に続いて屋敷に入った

「少し汗かいたから、風呂借りるぞ？」

「では、私も一緒に入ろう」

「・・・・・・出てけ」

連夜に続いて風呂場に入ったら、冷めた目をしながら追い出された

side・連夜

最近エヴァは変わってきていると感じている・・・・・・おかしい方向にだが
疲れた身体を癒すために湯に浸かる

「ふああああ・・・疲れが抜けてく〜」

エヴァの屋敷の浴場は15人くらい余裕で入れるくらいデカい
どうして祖父ちゃんは、こんなにもデカく造ったのかね？

明らかに多数の人が住む事を考えて造ってるよね？

エヴァの他に誰を住ませる気なのかな？

エヴァは不老不死の吸血鬼だから家族を作ること無いだろうし・・・
・唯一の家族は眷属になるのか？

でも、それだと此処に色々な意味で永住する事になるんだよね？

やっぱり祖父ちゃんの考えてる事は良く解らないな

身体を洗って、良く暖まってから風呂を出た

「出たよ〜」

身体を拭いて何故かある俺の服を着て、エヴァの居る大広間に向か
った

「さつき源太から連絡があったぞ」

テレビを見ながら、煎餅を食べているエヴァが話しかけてきた

「祖父ちゃんが？」

「いったい何だろう？」

「小学校には此処から通えだ。そこに荷物があるだろう？」

エヴァが大広間の隅を指差した

その先には幾つものダンボールが置いてあった

マジか・・・この屋敷は俺とエヴァの為に造ったのか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0325ba/>

義妹パラダイス

2012年1月4日08時47分発行